

## 雑感……いろいろな角度から考えること

明星大学 情報学部長 横山 保  
(前高岡短期大学学長)



モース・キンボールの『オペレーションズ・リサーチ』が出版されてからすでに42年になり、今日ではORは学問分野の中で立派な市民権をえている。しかし絶えず進歩してゆく分野では、専門領域を問われるとき、しばしば説明に困ることがある。

私は大学では、もっとも抽象的な学問の1つである純粋数学を学んだ。終戦の年(昭和20年)大学卒業後数年のあいだ、旧制の工業専門学校および経済専門学校で数学を教えていたが、経済専門学校時代の同僚、先輩の影響を受けて、若いときは経済理論の研究に熱中した。昭和29年の暮、国際計量経済学会に出席のため渡米して以来、こんどは経営科学および経営におけるコンピュータの利用に非常に強い関心をもつようになった。そのためか専門分野をきかされると、簡単に説明できなくてとまどうことがよくある。私の歩いてきた道は、よくいえば多分野的(学際的)研究の道であり、悪くいえばディレッタント(好事家)のそれである。

ディレッタントであることは必ずしも悪いことではない。創造的な仕事では、ディレッタント的な好奇心がときとして有用な役割を果たしていることがある。社会学者 マックス・ウェーバーは『職業としての学問』という著作の中で、ディレッタントの思いつきが、専門家のそれと比較して、勝るとも劣らぬことが多く、学問的業績が、このディレッタントの思いつきにしばしば依存していることを指摘している。

専門を尋ねられるときは、通常の学問の分類によって答えることが期待されていると考えるべき

であろう。学問分野を分類することは確かに、それぞれの分野の特性を明確にすることに役立つ。しかし学問の進歩によって、その分類の基礎的プリンシプルが崩壊してもなお、その分類を固執することは決してよいことではない。場合によっては、これが自由な思考の妨げになることもある。とにかく、いったん貼られたレッテルはなかなか取り除きにくい。必要であれば勇気をもって規制のレッテルを剝がさなければならない。学問の分野を狭く限定して、みずから壁をつくってしまうのは、進歩への道を閉ざすことになる。旧来の理科系、文科系、あるいは技術系、事務系といった区別に固執することは、今日の学問の実態からもはや不適切である。私の所属する明星大学の情報学部では、理系、文系の枠をこえた「情報」教育と研究を目的にしている。

科学(サイエンス)と人文学(ヒューマニティ)は、それぞれ理科系および文科系の学問とされてきたが、しかしこの両者は、じつは創造的研究活動の二面を構成している。割り切った1つの考え方として、『科学は一般性の追求(一見異なった事物の間の類似性の探究)を行ない、問題解決の手段として役立つ、人文学は独自性の追求(一見類似な事物のあいだの相違の探究)を行ない、問題発見に貢献する』といった主張もある。独創的な研究活動では、この全く相反するアプローチが、じつは重要な役割を果たしているようである。

もっとも客観的であり、論理的であり、一般に

個人的差がないように思われがちな数学の世界でも、研究・教育に学者の性格が反映されることがある。ポアンカレは数学者に「論理的」、「直観的」という2つの対立的なタイプがあるといっている。人によっては「代数的」、「幾何的」、「解析的」という3つのタイプに分けて議論することもある。こういったタイプの違いが、ときに大学教授の研究・講義に影響を与えることがあるのは当然のことと思われる。一般に大学においては、教育・研究の自主性がある。大学における講義は、それを担当する教授のいづく理論的、学問的体系にもとづいて展開されるものであり、科目内容としては同様であっても、そのもつニュアンスは一般的には異なる。教授（プロフェッサ）とは、信念をもって述べる人という意味である。信念の背後には学問的研究がある。大学教授は教育者であるとともに研究者である。研究活動は自ずから

信念を形成し、講義に深い陰影を与えることになる。そして、そこには多分に個性的なものが染みでてくるであろう。

ところで、理論的基礎を学んで应用能力の開発をはかることと、経験の積み重ねから理論的基盤をもとめることとは、学習の双対的な2つの面である。人によっては、前者はアカデミックで、大学の教育であり、後者は職業訓練的であり、専門学校教育であるとする。しかし、経験的・応用的学習と理論的・基礎的学習は、相反するがゆえにこそ相互に補完しあう性質のものである。とりわけORのような実践的な分野においては、一方の立場に偏して議論することは適切ではない。いずれの立場に重点を置くかは別として、両者の有機的結合の上に教育の展開を考えていくことが大切であると考えられる。

